

和歌山市民図書館指定管理者選定応募者の公開プレゼンテーション

和歌山市民図書館が南海和歌山市駅へ移転し、新館(4階建)が建設され、平成31年に開館予定です。新館開館後は現在の直営から指定管理者の運営となることが、残念ながら6月議会で決まってしまいました。

一部の市民のささやかながら反対運動があり、市民が市に対して、疑問を呈し、説明等を求め続けた結果、新図書館建設の説明会が複数回開催され、指定管理者選定の公開プレゼンテーションが、2017年11月24日和歌山あいあいセンターの150人収容のホールで開催されました。公開プレゼンとは、あまり聞いたことがないので、参加したので報告します。

参加業者はTRCとCCCの2社でした。TRCは事前に噂されていましたし、他に地元の荒尾書店の名が取りざたされていましたが、CCCは意外でした(今回はひっそりと登壇です。全国的な反対運動などの影響もあり、伏せられていたようです)。

◇TRC—図書館業務への安心感

さすが手慣れた見事なプレゼンです。まず、実績をアピール。図書館の事業展開については、危なくなく、直営の現在の図書館サービスよりはずっと良くなるように思わせるプレゼンです。

空間デザイナーを入れて魅力的な空間を作る、電子書籍や naxos ミュージックライブラリー、聞蔵、ジャパンナレッジ、ポプラディアネットなどのデータベースの導入、レファレンスもきっちりやる、移民資料をきっちり受け継ぎ、郷土資料のデジタル化をすすめる、児童奉仕を大事にし、親子で楽しむおはなし会を実施し、ボランティアとも良好な関係をつくる、YAを呼び込むために参加型イベントを企画する、学校図書館との連携、大学・医療機関とも連携、戦略的広報として、SNSでは#タグにより、紙媒体にもQRコードを付けて図書館利用者への誘導を考えている。また、書籍の購入については、200タイトルの雑誌を地元の宮脇書店から購入する。職員についても一定の条件で正規化する、地元の人材を活用する、1階は、憩いと賑わいゾーンとして、カフェを設け、地元業者と組んで雑貨や書籍の購入可能な賑わいゾーンにFM和歌山のサテライトスタジオを設置する、個人から団体対象まで幅広い層にアピールするイベントを展開する等々。

◇CCC—賑わい創出、地方都市の活性化をアピール

TSUTAYAの実績、今現在手掛けている武雄や多賀城などでの図書館運営管理事業の紹介から始め、図書館業務の具体的な提案部分はあまりなく、図書館を通じて**地方都市の賑わいを創出**と言うことに力点をおいていました。賑わいと言っても単なる賑わいではなく、生涯学習、学びを通じた賑わいであり、市の図書館だけの賑わいを目的にするのではなく、市内全域にサービスが広がり、地域の活性化をめざし、地域の力を高めることを応援し、そのことで**町の未来が生まれる**と締めくくりました。図書館本来の事業内容よりは、地方再生に力を入れたプレゼンでした。図書館業務については、TRCと比べるとあまり実績もなく、ノウハウの蓄積もなく、仕方がないのかもしれませんが。利便性の向上として、Tカード(和歌山市民の35%が所有)の導入をあげ、分類も独自分類をすることによって、新しい発見をしてもらえる(?)、自分たちの強みはマーケティングであり、それを活かした人づくり、町づくりのプラットフォームとしての図書館の提案です。出版社と提携したイベントも展開、当然、カフェは設け、本は売るし、文具も販売し、郷

土の物産の販売もします。4Fは子どものコーナーで、本のピラミッド(？、本の壁の替わりか映像で提示)や、プレイルームを設ける、屋上に公園を造り、食育を考える場にもし、子どもと遊べる施設にしたいと提案。

◇両方の提案を見、聞き比べると、

TRCは図書館事業としては手堅く、一定の安心感を与えてくれます。映像もきれいで説得力がありました。CCCは本来的な図書館業務についての具体的提案は薄く、賑わい創出に力を入れた提案で、図書館に関心のない人や、議員さんや、地元の商工業者さんに対してアピールするだろうと思われました。でも、新しく作る図書館ではなく、1981年開館、蔵書数60万冊の図書館で分類を変えたら、混乱が生じるだろうし、遊園地化、商業化した図書館ってどうなんだろう？

◇市民の意見も反映か

図書館指定管理者導入と聞いて心配した数人の市民が、図書館や教育委員会に足を運び、説明会を開いてくれ、市民の意見を聞く場を設けてくれと働きかけました。説明会場で指定管理者制度の問題点も指摘し、議員にも働きかけ、反対を表明したが、一部議員が反対表明をしたが、結果的には6月議会で通ってしまいましたのですが、市の説明会で、市民が抱えている問題点を市に提出していたのですが、今回のプレゼンではその意見を取り入れた提案になっていました。図書館が業者に示したのでしょう。

当初の市の計画では1Fは賑わいのフロアで、カフェ・観光案内で、本は置かない。2Fは児童書と子育て支援・ポピュラー本、3Fは集会交流エリア(ラーニングcommons等)、4Fは調査研究フロアとなっていて、3Fには本を置かず(後、YAコーナーを作ると改変)、2Fと4Fで資料の連続が途切れることや、業者の職員体制の問題を指摘していたら、今回どちらの提案でも子ども資料を4Fに上げ、2・3Fに資料をおく提案になっていました。館長には公立図書館で35年以上の司書経験者をとの要望を出していたら、そっくりその言葉でTRCからの提案があり、職員も地元から採用し、一部職員の正規化・無期雇用を進めるとの提案があり、CCCでさえ、10年以上の司書を派遣するとありました。

プレゼンの後、5人の選定委員が協議に入り、今現在、ほぼ決まっているはずですが、12議会で正式に業者が決まります。果たしてどちらになるのでしょうか？
(脇谷邦子)

—図書館問題研究会大阪支部報 No.512(2017年12月)より—

追記:選定委員会が選定したのは、CCCでした。選定理由を知るために、情報公開請求をすると開示されたのは、真っ黒な墨塗り文書でした。